

平成29年度（第39回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 平成29年9月10日(日)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

はじめに

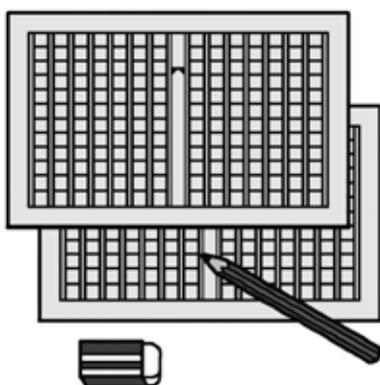
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で三十九回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身と言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



もくじ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

わたしの目指すもの

金沢市立野田中学校 三年 前田 瑞季……………3

優秀賞

〈山川草木悉有仏性〉

金沢大学附属中学校 三年 宮武 佳生……………4

学ぶことの意味って何だろう

石川県立金沢錦丘中学校 三年 福居 怜菜……………5

奨励賞

次へ

川北町立川北中学校 三年 浅田 夏菜……………6

勝利の先に見えたもの

七尾市立七尾東部中学校 三年 後山 唯……………7

口癖に秘められたもの

白山市立笠間中学校 三年 前中 皓多……………8

みんなちがって、みんないい

小松市立国府中学校 三年 須賀 結子……………9

かけがえのないもの

白山市立北辰中学校 三年 加木 翔大……………10

相手のために「一生懸命」になる

金沢市立鳴和中学校 三年 中谷 結偉……………11

「みんなちがってみんないい」

中能登町立中能登中学校 一年 上野 菜湖……………12

最後まで

七尾市立七尾中学校 三年 山口奈菜子……………13

言いたいことを言葉に・・・

七尾市立七尾中学校 一年 長谷さくら……………14

思いを伝える

小松市立芦城中学校 二年 横井 未菜……………15

真っ白な自分の可能性

小松市立南部中学校 三年 高市夕理乃……………16

戦争から学ぶ心

白山市立光野中学校 三年 川上結衣花……………17

救いたい

白山市立鳥越中学校 三年 米澤 愛……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査委員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長 日向 正志

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎平成29年度少年の主張全国大会

〈わたしの主張2017〉 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



〇さんとの出会いは、私が小学校六年生の時に通っていた習字教室でした。なんで挨拶をして入ってこないのだろう。高校生なのに冷たい人。彼の第一印象は最悪でした。しかし、彼の作品は勢いのある美しい文字。こんなに素敵な文字を書くのに、印象が悪い人になってしまった、もったいないなと思っていました。その後、自分の作品を出しに行こうとふと先生の方に目をやると、彼が添削されていました。

「あーあ、あの人の後ろに並ぶの嫌だな」

私は挨拶をしてくれない彼に対して、そう思いました。でも、どこか様子が違いました。何をしているの？と心の中で思っている、先生が彼の手のひらに何か書いていました。何で？と単純に思いました。そしてとても不思議な感じがしました。

「あつ、何か入っている」

耳の中に小さな機械が入っていることに気が付きました。それは補聴器でした。そうだったんだ、と一人で納得している自分がいました。それと同時に、彼に対して避ける気持ちを持った自分がとても恥ずかしくなりました。挨拶をしてくれなかったのは、聞こえていなかったからだったんだ。それは当然だ。そしてこうも思いました。勢いのある文字や美しさのある文字は、もしかして言葉を発することが出来ないから、感情がそのまま文字に表れているかもしれない。いや、そうに違いないと思いました。

それから私は、彼に対して挨拶の仕方を変えてみました。しっかりと顔を彼の方に向け、目が合ったら頭を下げる。反省の気持ちも込めて。気付いてくれると、笑顔で返してくれました。気持ちが通じました。気持ちが通じるって、心を穏やかにすることが出来るすばらしいものだ、私は思います。

また、彼はすごい力を持っています。陸上をしているのです。その活躍を新聞で初めて知りました。人より不自由でも、仲間と共に障がいのない人と同じことをしています。私が初めて障がいのある人の陸上を知るきっかけになりました。それからは、オリンピックだけでは

なく、パラリンピックにも興味を持ちました。パラリンピックで見たのは、片足が義足で競技をしている人や、重度の知的障がいのある人が走っている姿でした。見た目は大きく違います。でも、仲間と共に同じ目標に向かって、障がいがあるからといって妥協せず、練習に励んでいるみんなの顔はイキイキしていました。そして自信に満ちあふれていました。パラリンピックのような大会がもつと行われれば、なんでも出来る、そして誰にでも出来るという事が分かってもらえると思います。

私は中学生になり陸上部に入りました。私達と彼との違い、それは言葉で気持ちが伝えられるという事です。不平や不満があっても言葉で気持ちを伝えられない彼とは違い、私達は何でも話すことが出来るのです。でも、実際はそんな簡単ではありませんでした。言葉で話すことが出来ても、気持ちや意見が伝わらない時がたくさんありました。そんな時は一度立ち止まって考えてみます。相手に気持ちを伝えたい時、彼だったらどうするのだろうか。自分の気持ちを相手に伝えるよう心を込めて素直に伝え、相手の気持ちも受け入れる。心が通じ合っているだろうと思います。

私が目指すもの、それは人を認め合う、そして個性を認め合う、こんなチームを作ることです。このような気持ちを持ったのも、彼に会えたからだと思っています。まだまだ私は人の良い所を見習える時がたくさんあります。彼のように純粹に何でも真剣に取り組む姿勢、そして心を広くして相手と接すること。私もそんな風に仲間と気持ちを高め合っていく。これが私の目指すものであり、なるべき姿です。





皆さん、「山川草木悉有仏性」という言葉をご存知ですか。僕は、僧侶である祖父からこの言葉を聞きましたが、その意味をよく理解できませんでした。しかし、その後、ある一頭の犬から、この言葉に込められた深い意味を教わることとなりました。

その犬は、ドナといいます。僕の母は、保健所で「不要犬」として殺処分予定だった犬を引き取って世話をして、新しい飼い主に送り出す活動をしています。ドナもその一頭でした。当時のドナは、多くの預り犬の中でも特に警戒心が強く、一緒に保護された兄弟が巣立っても、ドナだけが残っているという状態でした。僕たち家族にはわりと慣れたのですが、他人が来ると糞尿を撒き散らして逃げ回り、机の下に逃げ込んでしまうのです。僕は、そんなドナを見て、まだまだダメだと思っていました。

そんなとき、我が家にまた新しい犬がやってきました。その犬もまた、警戒心が強く何日もケージでうずくまって出て来ませんでした。ドナは、毎日そのケージの前に行つて、何をしてもなく立ち止まり、そして去っていく……という行動を繰り返していました。それが数日続いたある日、ついにその犬が、前に立つドナに引かれるように一歩を踏み出したのです。そばにいた僕たちは、内心すごく興奮しましたが、息を飲んで見守るしかありませんでした。しかし、そんな中、あのドナが、その犬の横に並ぶと、何をしてもなくただ歩調を合わせ、ゆっくりゆっくり一緒に歩いたのでした。

あれから三年、その犬もドナもそれぞれの里親の下で幸せになりました。でも、僕はあの日の感動を忘れません。ずっと歩かなかった犬が歩いたことにも感動しましたが、何よりドナの姿が衝撃でした。一時は「不要犬」と判断されたあのドナが、まだまだダメだと思っていたあのドナが、一頭の犬に新たな一歩を踏み出す勇気を与えたのです。それは、ただの一步ではありません。新たな未来への一步です。あの時、ドナが何を考えていたのか、本当のところは分かりません。たまたま新しい犬に興味があっただけかもしれない。でも、理由は何であれドナの存在がその犬を動かしたことに間違いなし、そんな二頭の姿は、彼らを世話してあげているはずの僕に大切なことを教え

てくれました。そう、「山川草木悉有仏性」、すべての命に等しく力があり、価値があるということです。

僕たち人間は、往々にして「誰かに何かをしてあげたい」という気持ちになります。その気持ちそのものは尊いものに違いありませんが、ときにはそれは、「何かしてあげられる人は偉い」とか「できない人はダメだ」という意味に変化し、あげく「する側とされる側」に妙な上下関係を生じさせる危険をはらんでいます。実際、震災時のネットの書き込みで、「助けてもらっているくせに」などと、被災者を見下すような発言が見られました。ですが、「される側」もまた「する側」に必ず何かを与えているはず。誰かにとつての「される側」が、別のある人にとつての「する側」になっていることもあるでしょう。そしてそれは、必ずしも「何かをする」ことはなくても、あの日のドナのように「その人がそこに生きている」ただそれだけで、誰かの力になることだってありうるのです。

あれ以来僕は、「してあげる」という考えを捨てるようになりました。たとえば、サッカー部の後輩に対しては、「教えてあげる」のではなく、「教える」という行為の中で「僕も基礎を再確認する機会をもらった」のです。そうして上達した後輩が試合でよいプレーをしたときは、自分がよいプレーをしたときはまた違う喜びをもらえるし、その後輩の成長は、後輩自身は意図していないと思いますが、僕に自分も頑張ろうというヤル気をくれます。

これから僕たちの世界はますます拡がり、さまざまな出会いがあるでしょう。その中には、弱者と呼ばれる命もあるはず。そんなときこそ、すべての命に等しく力があり、関わりあって生きていくということを胸に、対等な命として向き合っていきたいと思います。





「一人の子供、一人の教師、一冊のノート、一本のペン、それで私達は世界を変えることができる。」これは、十七歳という若さでノーベル平和賞を受賞されたマララ・ユスフザイさんの言葉です。

今、世界には約五千万九百万人の子供達が教育を受けたくても受けることができない状況にあるそうです。その多くの子供たちは、生活のために働いていたり、兵士になって戦場で戦っていたりしています。そして、その多くの子供達は、学校へ行きたい、明るい未来を築きたいと願っているのです。

みなさんは、教育を受けることの意味は何だと思いますか。マララさんの言葉に出会ってからの私は、教育とはよりよい生活を築くためのものだと考えるようになりました。私達が多くの事を学ぶことで、紛争・饑餓・差別・病気を解決することにつながると思っていたからです。私も、恵まれない環境にいる子供達に負けまいよう勉強しようと決意しました。

しかし、私の決意は長続きしませんでした。なぜなら、私は両親に褒められたい、何でもできる姉に少しでも追いつきたいという思いで勉強していたからです。だから、テストが終了したらのんびりして、点数ばかり気になって、そのあと勉強する気力もなかなかわき起こってきませんでした。ある時、そんな私に、母は、「何やっているの」と厳しく注意しました。そして母は言いました。「お父さんが勉強についていつも何も言わないのは、お姉ちゃんに追いつきたいというだけ勉強してほしいからだよ。自分自身で学ぶことの大切さや楽しさ、ありがたさを感じてほしいっていつもいつてるよ」と。私は、学校の成績や勉強に関して注意されたことが一度もありません。だから、勉強が苦手な私にあまり期待していないのだろうと思いついていました。私は、勝手に姉と比較して劣等感を抱いて、勉強する理由を見失っていたのではないかとほっとしました。そんな時、マララさんがヨルダンの難民キャンプを訪問した、というニュースが飛び込んできました。私は、何年も何年も子供達の成長を案じ、明るい未来を信

じて活動しているマララさんが、映しだされたテレビの画面を食い入るようにみつめました。すると、マララさんが大きな目で私をじっと見つめ返しているような気がしました。その目は、「世界中の人々は、ここにいる子供達の明るい未来のために行動しなければならぬ。」そう訴えかけていました。ペンすら握ることのできない子供達が悲しい思いをしているのに、私は何をしているのか、とても恥ずかしく情けなくなりました。

中学生の私にできることは何でしょうか。それは、学ぶことと伝えること。姉と比べるのではなく、教育を受けることができなくても、五千万九百万人と比べるのでもなく、豊かなこの生活の中でも自分を見失わず、一生懸命学ぶこと。そして、学ぶことで、新しい考えをもったり、できないことができたりする喜びを、マララさんのように、一人でも多くの人に伝えていくこと。それが、今の私にできること、これから私がしなければならぬことだと思っています。

私は、学ぶことには世界中で起こっている様々な問題を解決していく力があると思っています。一人では解決できないことも、学んだことをみんなと活用し、知恵を絞ることで必ず解決する方法を見つけることができると思っています。教育には、私達の可能性を広げる力、夢を叶える力があるはず。マララさんの言葉に出会ったことが、「学ぶこと」の意味を私に考えさせてくれました。改めて今、みなさんもなぜ学ぶのか考えてみませんか。学ぶことが私達の明るい未来を創ると信じて。





私は剣道部に所属していました。七月に行われた県大会で惜しくも敗れてしまい、引退することになりました。この最後の大会で思うような結果を残せなかったものの、約二年半という短い時間の中で、たくさんの人に支えられ、多くのことを学び、技術的にも精神的にも大きく成長することができました。

私は、この二年半の剣道部の活動を通じて「三つの感謝」が心の中に芽生えています。

一つ目の「感謝」は、仲間がいるということです。考え方の違いから、意見が合わないことも度々ありました。ですが互いに話し合い、課題を解決し、全員がかみ合い、「川北中剣道部」が仕上がった瞬間、強い根で支えられたかのような、太くて大きい、どんな困難にも揺らぐことのない「チーム」が作り上げられます。勝利の可能性がゼロに近い試合であったとしても、声をつなぎ、技をつなぎ、気持ちをつないで全員で挑んできました。団体でも試合場に入れば一人です。誰の助けも借りられない、孤独との戦いが始まります。その空間はとても重く、大きな責任がのしかかります。その中で勝利したときは、言葉にできない感動が胸いっぱい広がります。しかし、そこまでの道のりは決して楽なものではありません。辛い稽古の連続に辞めなくなる時もありました。そんなとき「ファイト！」と仲間の声が道場いっぱい響きわたると、心の中は自ずと「がんばろう」という気持ち一色に染まりました。確かにスポーツは一人でもできます。しかし、団体だからこそ、川北中剣道部だからこそここまでできることができたのだと思います。

二つ目の「感謝」は、教えて下さる先生がいるということです。剣道は実に難しいスポーツです。基本が身に付いていなければ何もできません。その基本を丁寧に教えて下さったのが、顧問の先生です。技術面だけではありません。人間性や人生面についてもたくさん指導して下さいました。「負けてもいい。自分のここぞというタイミングで百パーセントの力を出し切ることができればいい。その後、課題を解決していこう」これは顧問の先生からいただいた言葉です。この言葉には、前向きさや自信を常に持ち、前進していくという意味が込めら

れていると思います。辛い時は、何度も助けられたことを覚えています。私にとって、心の支えとなる力強い言葉となりました。

三つ目の「感謝」は、応援してくれる家族がいることです。道着や綿布の洗濯、早朝や夜遅くの送り迎え、弁当作りなど、数えきれないほどのお世話をしてもらいました。また大会の時には「がんばれ!」「お疲れ様」といった言葉を保護者の方々からかけてもらいました。家族だけでなく、周りの人からも応援されることは誇らしく思え、なにより背中強く押してくれました。

全ての事を踏まえ、私はようやく気づくことができました。それは、「当たり前は、当たり前ではない」ということです。今まで私が言っていた「ありがとうございます」はただのものにすぎなかったのかもしれません。しかし、今は違います。「当たり前のことが当たり前にできる」その時に湧き起こってくる気持ちこそが本当の「ありがとうございました」であることを部活動のメンバーや先生方、家族や保護者の方々の支えを通して実感することができました。

剣道部を引退し、ふとした瞬間に日々の稽古をふり返ってみると、改めて充実した時間を過ごしていたことに気付かされました。剣道を通じて、技術的にも、人間的にも大きく成長することができ、良かったです。これまでに会ってきた多くの方々への感謝、そして何より剣道に出会えたことへの感謝を忘れず、前進していきます。

現在、私は受験生です。これまでに培ってきた「感謝」の心を土台とし、勉強面においても日々継続し、がんばります。そして、応援してくれている方々へ少しでも多くの期待に応えられるよう、精一杯努めていきます。そして大きくはばたいてみせます。次へのステージへ向かって。





「勝ちたい。こんなんじゃダメだ。こんなんじゃ勝てない。もつと…もつと上手くならなきゃ。勝つために。」私は毎日こんなことを考えていました。あなたにとって勝利って何ですか？一点、一秒が勝敗を決する中で勝利は言葉にできないほどの喜びを与えてくれます。ですが、本当に「勝つこと」だけが大切なのでしょうか。

私は、吹奏楽部に入部し、ずっと憧れていたアルトサククスという楽器の担当になりました。どんなに下手くそでも、ただ楽器を演奏できることが楽しくてしかたがありませんでした。一年生のアンサンブルコンテストでは思うように結果を残せませんでした。落ちこむ私に先輩は、優しく声をかけてくれました。そのとき、私は同学年の子と約束しました。「来年は絶対に金賞をとる。」それから、私の中で、楽器は勝利のために演奏するものに変わっていききました。

三年生が引退し、二年生のアンサンブルコンテストの練習が始まりました。しかし、練習場所には、私と後輩のみ。「用事があったのかな。」初めはそう思っていたのですが、一週間たつても二週間たつても同学年の子は部活に来ませんでした。私は毎日、イライラしながら練習していました。

同学年の子が部活に来た日、私はたえられなくなって「なんでいつも部活休むん？そんなにやる気ないが？絶対金賞とろうって約束したよね？うそやつたん？どうせ家で遊んどれんろ？」そんな風に言ってしまうました。同学年の子は「ごめん、本当にごめん。」と言い訳をすることもなくあやまり続けました。そんな態度にもイライラして、私はその日の練習のとき、後輩に絶対に言ってはならないことを言ってしまうました。

「なんでできんがん？」後輩は、毎日朝練に行っていました。朝、彼女の音が聞こえない日はありませんでした。休日は楽器を持って帰り一生懸命練習に励んでいました。それなのに、私は、こんなひどいことを言ってしまうました。ひどいことを言ったという罪悪感はあるのですが、私はその日、後輩にしっかりとあやまることができました。

その日の練習の後、先輩が楽譜を片づけ忘れていました。その楽譜を見て、私は驚きました。私がふと言ったこと、全て書いてあるのです。その楽譜はもう音符が見えないぐらい真っ黒になっていて、私は

涙があふれました。

そして、アンサンブルコンテスト一週間前、同学年の子が部活に来ませんでした。私は、先生に「本当、何してるんですかね。」といらだちながらたずねました。すると、先生は、「その子には、あなたが気を使うから言わないでって言われたんだけどね。」と言い、部活に來れない事情を教えてくださいました。同学年の子は、母親が病にかかっているため、身の回りの世話をしながら付きそっていたそうです。私は、自分に怒りを感じました。何も知らずにひどいことを言って支えてあげなければならぬ時にせめてしまいました。そのとき、私は思いました。「いつからこんなに楽器吹くのつらかったっけ。前はあんなに楽しかったのに。」

そして、アンサンブルコンテスト当日、舞台裏で今の気持ちを伝えました。「今日の演奏を楽しもうね。」と。結果は金賞。私はみんなに言いました。「今までひどいこといっぱい言ってごめんね。それと、この金賞は私だけじゃなくて、みんなの努力のおかげだよ。本当にありがとう。」

私は、勝つことだけにとらわれて大切なことを忘れていました。たしかに、勝負をすててはいけません。勝ちたいと思う気持ちは大事だと思います。ですが、物事を全力で楽しむ気持ちも同じくらい大事なことで私は思います。そして、私達には、自分を信じてくれる仲間がいます。「仲間は生涯の宝」共に練習に励み努力すれば、勝利に対する喜びは何倍にもなります。そして、悲しみは何分の一にもなれません。そんな存在があなたの身の周りにいることを決断して忘れず大切にしてください。私は、まだ中学校三年生です。私が進む人生という名の道にはたくさんさんの勝負の場面がやってきます。私は何事にも感謝する心と楽しいと思える素直な心を持って取り組んでいきたいです。それが、真の勝利につながると思うから。





「どうやってたら、自分が苦手なものから逃げられるのだろう」面倒くさいことにはなるべく関わりたくない。中学三年生の私の本音である。

学校の行き帰りで何気なく交わされる会話、その節々に、「面倒」、「どっちでもいいんじゃない」、「適当」という言葉があふれている。中学生男子の会話としてはごく一般的なものだと思ってきた。勉強でも、学校生活でもそうやって過ごすことが一番楽だと思っていたからだ。

あるとき、私は友達に頼みごとをした。頼みごと自体はたいしたものではなかったと思うが、次の瞬間、相手は私に「えー面倒くさい」と言った。その時「え」という感情が心の中に生まれた。私自身が何気なく使ってきた口癖。しかし、いざ面と向かって言われると、なぜこんなに傷つくのだろう。

私と友達の関係は決して悪くはない。しかし、「面倒」という言葉で全てのものを片付けられる私と彼の関係は本当に友達といえるのか、不安になった。

考えてみると、社会問題として取り上げられているいじめも始まりは些細な言葉だ。「何となく」、「無意識」という言葉で片付けられてしまっていることが多い。私自身が日々、身をもって実感していることだ。

親は将来のために勉強をしろという。先生はもしかして、私達によい子になることを期待しているのではないか。物事を悪い方に捉えるのと、とことん突き詰めてしまいうようになる。

そんなとき、国語の授業で「ネガティブ」な言葉を「ポジティブ」に変換してみるということに挑戦した。そんな簡単に変わらないだろう、と半信半疑で取り組んでいると、面白いぐらいに夢中になってしまった。「落ち着きがない」を「好奇心旺盛」、「うるさい」は「コミュニケーションが豊か」などという具合だ。だんだん言葉の面白さに惹かれていく自分がちよっと誇らしくも思えてきたとき、先生から

新しい言葉が投げかけられた。「次は面倒という言葉を通してみましょう」私は少しばつの悪い思いはあったが、なんだかやってみようという思いで考えはじめた。「面倒」、「やりたくない」、「できない」、頭の中を左右に振っても出てこない気分だった。別の友達が大きな声で「自分のためだ」と言った。また別の友達が「難しいことだがやりがある」と言った。この時、私はハッ、とした。同時に自分の顔が赤くなるのを感じた。

今まで何を悩んできたのだろう。自分の口癖を利用して自分から逃げてきただけなのではないか。自分でできることが何かも考えていないのではないか。今、私にできることはなにのだろうか。深く考えてみたいと思った。

「面倒」なことは将来生きていく上で必要なことだと気付いた。勉強、スポーツ、手伝いなどがそれに当たるだろう。「面倒」だけれどやってみる。これこそが自分に今、必要なものと、確信した。

私は今回の体験や経験を通して、今の自分を見直すことができた。逃げることは、自分を救うことではなく、ただ嫌な自分から逃げていくだけなのだ。自分が変わるチャンスを自分で消してしまっている。所詮口癖、されど口癖なのだ。

自分の口癖を知っている人はどれだけいるだろうか。人に指摘されるまで気付かない人がほとんどだろう。私が逃げない自分を取り戻せそうなのは、自分で自分の口癖を見直せたからだと思うている。

「面倒」という言葉は必要だろうか。結論はまだ完全ではない。皆さんも一緒に考えてみてほしい。





「みんなちがって、みんないい」。みなさんはこの言葉を一度は聞いたことがあるのではないだろうか。この言葉は金子みすずの「わたしと小鳥とすずと」の最後の一文にある言葉です。私は小学生の頃、この詩を歌ったことがあります。その時はこの言葉の意味を、はつきりとは理解していませんでした。しかし、今では違います。「みんなちがって、みんないい」と思えることはとても幸せで、みんなが平等であることを示していると私は思えるようになりました。

私は、今年の三月までマレーシアという国に、約二年間住んでいました。私が住んでいたところは、マレーシアで第二の都市と呼ばれるペナン島という小さな島でした。私はそこに住んでいた時、看板を見るのが好きでした。ローマ字でかいてありますが、意味は分かりません。マレー語で書いてある看板もあれば、英語や中国語、日本語もありました。文字なのか飾りなのか見分けるのに戸惑うようなインド系のタミル語の看板もありました。看板だけでも分かるようにマレーシアには、いろいろな民族の人が住んでいます。だから、料理も様々です。中華料理、インド料理、和食、イタリア料理などがありました。中には、ニョニヤ料理という中華系とインド系が混ざったものもありました。食べ方も、箸を使ったり、フォークとナイフだったり、手を使って食べる時もありました。ペナン島のガーニードライブという所では屋台が立ち並び、多くの民族の人が入り混じって、いろいろな料理を食べています。経済的な発展はまだですが、心の広さは日本よりも広くて深い温かい国だと私は胸をはって言えます。

マレーシアのいいところだと私が思う陽だまりのような温かさ。これは、母国語のマレー語にも出ています。例えば、「ありがとう」という言葉。私たちが言われて嬉しい言葉です。日本語の「ありがとう」は「滅多にないこと」という意味があるそうです。また、英語の「サンキュー」には「私はあなたに感謝する」という意味があります。そして、マレー語で言う「ありがとう」は「テリマカシー」です。この言葉の意味は、「テリマ」で「受け取る」、「カシ」で「愛情」なので、「あ

なたの愛情を受け取りました」という意味になります。素敵な意味が込められている言葉だと思いませんか。

私は、その時通っていたペナン日本小学校の校長先生の話からその言葉の意味を知りました。その時に、私は心の奥がじんわり温まるような素敵な言葉だと感じました。この、「テリマカシー」を私はよく、住んでいたところの用務員さんに言っていました。エレベーターで扉を開けて待っていてくれる。そんな時にちゃんと伝わるようにマレー語でお礼を言っていました。そうすると彼らはすごく喜んでくれました。喜んでくれているのが伝わってきて私も嬉しくなるほどです。そして、私が日本人だと知っていると知っている日本語を話してくれました。自分たちの文化や言葉が好き、だけど他の国の文化や言葉だってちゃんと認めてくれる。「みんなちがって、みんないい」という言葉の意味が初めてわかったような気がしました。

四月に、私は日本に戻ってきました。私が今住む小松市には、たくさんの方々が住んでいます。しかし、私たち日本人は本当に彼らのことをしっかりと受け入れていてほしいだろうか。私は、「みんなちがって、みんないい」と堂々と伝える人になりたいです。そのことをマレーシアの人に教えられました。そのための第一歩として、マレーシアで教えられたことをたくさんの方々に伝えていきたいです。そして、日本が外国人をもっと受け入れる国になるきっかけ作りをしていきたいと思えます。





みなさんは、自分のまわりに家族や友達がいるのが当たり前だと思っ
ていませんか？毎日会って話して笑い合ったり、喧嘩したり。そんな
家族や友達が、もし、いなくなったら？試練に遭ったとき、一人で乗
り越えられるでしょうか。僕がそんなことを考えるようになったきつ
かけは、目をケガしてしまったことからでした。

僕は野球部に所属しています。中学一年の部活に入ってすぐのこと
でした。練習中に先輩の打った打球が右目に当たってしまったので
す。病院で診察を受けた結果、医師に、

「失明するかもしれない。手術が必要だ。」

と、言われました。その瞬間、目の前が真っ白になり、今まで通り野
球が続けられなくなったらどうしよう。視力が落ちたらどうしよう。

という不安で頭がいっぱいになりました。その後、手術するまでの間
はケガをした目に眼帯をつけていなくてはいけませんでした。眼帯を
した自分の姿はとても不格好で、すごく違和感がありました。僕は、
からかわれるんじゃないかと心配でしたが、友達はみんな、「大丈
夫？」「どうしたん？」

などと、優しく声をかけてくれました。その言葉がとても嬉しく、安
心した気持ちになりました。ちょっととした声かけが、不安な心をいや
してくれるということを知りました。そして手術前日。クラスのみん
なからのメッセージを渡されました。そこには、

「こわくない！」「がんばって！」

という言葉が沢山書いてありました。ここまで思ってくれていたのか
と思うと、思わず涙が出そうでした。

そしていよいよ手術当日。緊張していた僕に親や祖父母は、

「大丈夫や、すぐおわる。」「痛くないから。」と、声をかけてくれま
した。不安でいっぱいのが持ちは少し和らぎました。手術は全身麻酔
で四時間程もかかった大変な手術でした。手術後、意識がもどり、目
を開けようとすると、ピリッと電気が走ったような痛みを感じ、「痛
っ」と、僕は叫んでしまいました。すると、

「大丈夫!？」

という声が聞こえました。前を見ると、母が心配そうに泣きながら僕
の顔をうかがっていました。母の顔を見たとき、音が聞こえてきそう
なくらい心臓がバクバクしました。心配してくれた母も辛い思いをし
たんだと感じました。このときの母の顔を僕は一生忘れないと思いま
す。幸い手術は成功し、僕は失明の危機から救われました。それから、
入院生活が始まりました。病院での生活は、とても辛いものでした。
話す人もおらず、孤独と闘う毎日でした。学校では今頃みんなどうし
ているのか。部活や勉強の遅れは取り戻せるのだろうか。一人でいる
と、色々なことを考えて、どんどん不安になっていきました。そんな
中、唯一楽しみだったのが、家族や友達と会える時間でした。沢山の
人がお見舞いに来てくれ、

「早く学校戻ってこいや。」「思ったより元気そうで良かった。」

と、言ってくれました。そういう何気ない会話や冗談を言いあえるこ
とが本当に嬉しかったです。家族は一時間近くかけて毎日来てくれ
て、自分がどれだけ愛されているか、思ってもらっているかを感じる
ことが出来ました。入院生活が終わり、僕は無事、元の生活に戻るこ
とが出来ました。でも、もし、あの時、家族や友達の支えがなかった
ら、僕は、失明するかもしれないという危機を乗り越えられなかった
と思います。

いつも側にいてくれる、毎日会話でき
る、だからこそ忘れがちな感謝は決して
忘れてはいけないう大切なものだ、と僕は
目のケガを通して学びました。近くに
いるからこそ忘れがちで、近くに
いるからこそ忘れてはいけないもの、それが感謝
です。見えないところでも、ずっと支え
続けてくれている存在。家族や友達が近
くにいて幸せを忘れないで、常に感謝の
気持ちを忘れずにいたいと思います。



奨励賞 相手のために「一生懸命」になる

金沢市立鳴和中学校 三年 中谷 結偉



皆さんは、相手のために「一生懸命」になったことがありますか。以前行った百万石祭りで、ゴミ拾いの活動をしている人たちを見かけました。暑い中、汗をかきながらたくさんの袋を抱えもち、みんなゴミを拾っていました。お祭りを楽しみに来る方々の為に、一生懸命ゴミを拾うその姿に、私はとても感動しました。その方々のおかげで街が美しくなり、とても気持ちよくお祭りを楽しむことができました。

私は小学生の時、募金活動のボランティアに参加したことがあります。ボランティアを始めるまでは恥ずかしくてやりたくない気持ちもありました。でも、参加してみたら気持ちが変わりました。地球上には戦争や貧しさのため食事も十分にとれない人や、学校にいけない子供達がたくさんいることを学び、そういう人達を助けたくて、私も必死に募金を呼びかけました。多くの方々が寄付をしてくださり、「頑張ってね!」と私達に励ましの言葉をかけてくれました。みんなの思いやりの心が伝わってきて、私の心もとても温かくなりました。ボランティアは、誰かが自分の頑張る姿を見てくれて、相手に想いが伝わるものだと感じました。

私は、それぞれの体験を通して、ボランティア活動をしている人達には共通点があると思いました。それはみんなが相手のために一生懸命だということです。自分のことよりも少しでも困っている人の役に立ちたいと、自分の意思をしっかり持ちながら、相手のことを考える人だと思っています。

ボランティアは、自分ばかりが損をして苦痛だと感じるものではありません。自分から進んでしたくなるほど、心が温かくなり、お互い気持ちが悪くなるものだと私は思います。こうした一人ひとりの尊い思いやりの心が、多くの人々を救い、みんなの幸せにつながっていくのだと思いました。

私は今、学校の生徒会長をしています。生徒会執行部の仕事は、行事の企画、運営、学校をより良くするための活動を行うことです。その事を通して分かったのは、一つひとつの行事に先生や私達生

徒、地域の方などたくさんの人達が携わり、一生懸命に自分の役割を果たしているということです。

例えば合唱コンクールでは、指揮者、伴奏者、クラス責任者をはじめ、歌詞係や練習で使うピアノを運ぶ係など、その他にも本当にたくさんの方が一生懸命に取り組んでいました。また、先生方や生徒会も前日まで何度もリハーサルを繰り返していました。見る側だったのが裏方として運営する側になることで今までは見方が変わり、初めてみんなの大変さを実感しました。そしてたくさんの方々の支えのおかげで、毎年すばらしい合唱コンクールが創りあげられていることに気がきました。

見えないところで、たくさんの方が支えがあるということ。私達は助け合いのなかで生きていくということ。今まで見えなかったものに気付くと、また今日も元気に過ごせることのありがたさが身に沁みます。だから私は、支えてもらっている毎日に感謝し、一人でも多くのひとに恩返しをしたいです。そしてそれを実践できるのが、ボランティアだと思います。

「ボランティア」ができるチャンスはどこにでもあります。皆さんもベルマークを集めたり、キャップやプルタブを捨てずに集めて寄付してみたり、そんな小さなことから始めてみませんか。思いやりのこもった心遣いをしてみませんか。一人ひとりが相手を大切にすることで、みんなが幸せになります。だから私は、これからもボランティア活動に積極的に参加していきたいです。身近な人達、世界中の人達が幸せな笑顔でいられますよう、一人ひとりと尊い出会いを大切にしたいです。まずは私から真心をこめて実践していきます。

皆さんもぜひ一緒に、相手のために「一生懸命」になってみませんか。





私には、発達障害の弟がいます。発達障害とは、対人関係がうまく築けないことがあったり、そのほかには特定のものに強い興味をもったり、また嫌がったりすることがある障害です。

弟は、周りの人と上手にコミュニケーションを取ることや、自分の気持ちを表現することが苦手です。ご飯を食べる時には、上手に箸が使えません。ひとり言をぶつぶつ言ったり、突然思い出し笑いをしてしまいます。私は、そんな弟のことを周りから笑われ、バカにされてきました。悔しくて悔しくて、涙が出たこともありました。家族はそんな弟ばかりを気にかけて、私はそれもさみしかったのです。

ある日、私はそんな自分の気持ちを母に打ち明けました。母は言いました。

「弟だって苦しんでいるんだよ。さみしいかもしれないけど、お姉ちゃんには一番に弟の障害について理解してほしいな。このままでは、弟のことをバカにして笑う人と一緒だよ。」

弟の障害についてもっと知りたい。家族である私が、まずは弟のことを理解しなくては。

小学校四年生の国語の授業で「研究レポート」を書くことになった私は、迷わず「発達障害」について詳しく調べることになりました。

本やインターネット、弟に一番関わっている母へのインタビューをレポートにまとめました。弟のことをクラスのみんなに話すことは、正直、勇気がいりました。もしかしたら私のことを嫌がる人もいるかもしれない。

でも、弟のことをわかってほしい。

発表後、周りの友達は、弟のことを笑ったり、バカにしたりしなくなりました。弟にやさしい声をかけてくれる人も増えたように思えます。

私自身も、今まで恥ずかしいとばかり考えていた弟のことを、以前よりは理解することができた気がします。

発達障害を抱える人はこの世の中にたくさんいます。現在日本の小中学生の約七パーセントの子どもが発達障害を持つというデータがあります。つまり、一クラスに二、三人の子どもに発達障害があるとい

うことになりました。発達障害の厄介なところは、パッと見ただけではわかりにくく周りに理解されないという点にあります。そのため、障害そのものよりも周りに理解されないことに苦しんでいる……といってもよいかもしれません。

私の弟はとても純粋で素直です。生意気なことも言いますが、人を悪く思うことがないのか、人の悪口をいうことはありません。好きなことに対しては、とても勉強家で、記憶力がとても良いです。私の知らないことをたくさん教えてくれるので、驚かされることがあります。私は弟のそんな素敵なところを、もつと多くの人に知ってほしいと思うし、弟と同じような発達障害がある人みんなが、もつと生きやすい世の中になってほしいと心から思います。

金子みすゞさんの詩に、こんな言葉があります。「鈴と小鳥とそれから私、みんな違ってみんないい。」

みんな違って当たり前。視力が極端に悪いという障害は、眼鏡をかければ生活上の困難は解消されます。同じように発達障害も、何らかの手立てを講じればもつと生きやすい社会になるはずだと私は考えます。

皆さんはご存知ですか？偉大なる発明家エジソンも、相対性理論を生み出したアインシュタイン、日本では幕末期に活躍した坂本龍馬や放浪の画家、山下清も発達障害があったといわれています。

障害を一つの個性ととらえ、その個性が花開くような社会を作るには、まずはお互いに思いやりをもって相手を知ること。それがこれからの社会について必要なことではないでしょうか。

私にできることは、弟のことを堂々と語れる自分になることです。そんな小さなことですが、まずはそこから始め、一人一人の個性が認められる社会を、自分から作っていききたいです。





「うっぎ。もう絶交。」
友だちに言われました。私は、

「なんで？勝手に話、進めんといて。」

言いたいのに言えませんでした。そう、臆病者の私は、気が弱く勇気が出ず、その後の関係が崩れることをおそれていたのです。私は、思いを伝えられなかったことに対して後悔し、反省しました。

私のような思いをする人が一人でも減ればいいな、と痛感しています。

私の考えること一つ目。思ったことを相手に伝える。その後の関係をよくすると思えば、言った方がいいのだと思います。もし言っていれば、

「そうやね。私が悪かった。」って仲直りできていたのかなと思います。これは授業などの日常生活でも言えることだと思います。私は、小学生の時に勇気が出ず、自分の考えを発表できずに終わってしまっただことが何回もありました。その時も「あの時、勇気を出していれば」と同じような気持ちになりました。やっぱり自分の持った考えは、積極的に言うべきです。でも「その服だっさ。」や「きもち悪いから来るな。」のような自分が言われていやな事は言わない方がいいのだと思います。もし、自分がされていやな事は言わない方がいいのだと思います。言い方を変えて伝えるのは、相手も嫌な気にならずに直してくれると思います。私は、動画をよく見るのですが、コメント欄に「こいつきらい」や「それな。私もきらい。」などのコメントがありました。正直な言葉かもしれない。けれど、言っている言葉と悪い言葉の区別もつかないのかと思うとこんな人にはなりたくないなど見るたびに思います。

私の考えること二つ目。どうしても口で伝えられないことは、手紙で伝える。

突然ですが、みなさん。みなさんは、両親に「ありがとう。」と自分の口で伝えたことはありますか？しかも、日常的な会話ではなく、

面と向かって。私は、普段はずかしくて言えないことは、別の方法でも伝わると思います。

その中でも一番伝わると思うのが手紙です。最近では、スマートフォンなどでもやりとりができますが、ありがとうなどの大切な言葉は、手書きで伝えるのが一番伝わると思います。自分は字がきたないから。という人もいますが、誰でも自分のために一生懸命、書いてくれたり、話してくれたたりするのはうれしいものです。私にはとても仲の良い友達があります。その友達に、誕生日のお祝いでサプライズをしてもらったことがあります。その時にプレゼントといっしょに「さくらのすきなところ」と紙いっばいに書かれたものをもらいました。それを見て私は号泣しました。手紙は、遠く離れている人とコミュニケーションをとるためにあります。ですが、近くにいる人に思いを伝えるためにも書いてみてはどうですか？

私は今まで、友達には一方的に言われ、家族には思ってもいないことを言い、授業では言いたいことを言えずに終わってしまうことが多かったです。私は、このような経験を通して、その後の関係をよくするために、伝える方法を変えればいいのかと分かりました。

「自分の思いを伝える」ということを考えさせてくれた、家族、周りの友達にはとっても感謝しています。

みなさんも、伝えてみませんか？自分の思いを自分の言葉に変えて。





私は幼い頃から父の仕事の都合で色々なところに引っ越しをしました。その中で、一番大きな環境の変化を感じたのは七歳の時です。中国の上海に行きました。初めて海外に住むと聞いてどきどきしました。しかも、インターナショナルスクールに通うことになり、英語での学校生活が始まることに驚きを隠せませんでした。

家族とは日本語で話していましたが、家から一歩出ると外は中国語であふれ、学校ではすべてが英語になるので、どちらの言語も話せない私は戸惑うことばかりでした。初めはジェスチャーや単語で自分の意志を伝えようと思いました。周りの人も理解しようとしてくれたので、とても助けられました。クラスメイトや先生が、言葉の分からない私にも話しかけてくれたので、次第に何を言っているのかが分かるようになりました。また、もっとみんなと会話をしたいと思えば本を読んだり音読したりして一生懸命勉強をしました。

学校にはいろいろな国籍の生徒や先生がいました。私のように英語が話せない生徒のための英語の授業があり、カリフォルニア州出身の先生から大切なことを教わりました。

「英語は一種類だけではないよ。それぞれの国のなまりの英語があることを知ってね。いろいろな英語を聞いて、恥ずかしがらずに言葉に出すことが大事だよ。」

「世界の言語は英語だけでなく、母国語もその中の一つだったことを忘れないで、大切にしていね。」

この二つの言葉が私に勇気をくれました。そして、自分らしい英語を話せるようになるという気持ちと、日本語を大切にしようという気持ちが生れました。

小学校三年生の時に日本に帰ってきて一番困ったのは漢字でした。漢字を見て、何となく読むことはできて、書くことができず、とても苦労しました。一、二年生の漢字から練習したり、音読の宿題は必ず親の前でやったり、日本語の語彙を増やそうと努力しました。そのおかげで、書ける漢字は増え、自分自身でも語彙力がついてきたと感

じるようになりました。すると、もっと自分の思いを伝えたい、表現したい、友だちの思いを知りたいという気持ちが増えてきました。

海外や日本でも、自分の思いを伝えるには「伝えたい」気持ちが大切です。英語も日本語も語彙力が自分の思いを表現する手助けになります。語彙力を付けるためには、音読したり本をたくさん読んだりすることが大切だと思います。そして何よりも言葉を口に出して伝えることが大切です。

確かに以心伝心という言葉もあります。相手を見ただけで、何を言いたいのかがわかる関係もとても素敵です。けれどもその言葉は英語にすると、「テレパシー」です。テレパシーなんてものを、相手に求めていいのでしょうか。

私は今まで自分の思いを伝えたい、相手の思いを知りたいという気持ちを大切にしてきました。そして、そこから生まれたものは、笑顔です。時には思いがうまく言葉にできないときもありました。それでも、どうか、恐れなくてください。「伝えたい」という気持ちがあれば、思いはきっと伝わります。

みなさんも、もっと恥ずかしがらずに自分の思いを伝えてみてはどうでしょうか。





みなさんは、自分が友だちからどのようなイメージを持たれているか、ということを考えてことがありますか。また、そのイメージが、自分がうれしくないものであったという経験はありませんか。それが、私でした。

私は、休み時間に勉強したり本を読んだりしているだけで、友達から「真面目だ」といわれることがあります。他の人と同じことをしていても、「さすが優等生」といわれることもあります。そんなとき、私は「またか」とうんざりした気持ちになります。「真面目だ」という言葉は、普通ならほめ言葉です。でも、その言葉を聞くと、私は複雑な気持ちになってしまいます。なぜなら、その言葉が私の言動に「ロック」をかけてしまうからです。

例えば、教室が騒がしいとき。「みんな静かにしようよ。」という言葉葉を、私はいつも飲み込んでしまいます。それを言ったら、みんなはどう思うのだろうか、とつい周りの目を気にしてしまうようになりました。

そんな私に、転機を与えてくれたのは、「小松市中学生サミット」でした。「中学生サミット」では、市内の中学校の代表者が集まり、ネットトラブルを防ぐために、中学生に呼びかけるという活動をしています。

私は、学校の代表として、他の学校の生徒と意見を出し合い、考えを深めていけることが楽しかったです。

なぜなら、普段の学級での話し合いでは、なかなか意見が出ず、活発な話し合いができないと感じることがよくあったからです。話し合いがうまくいかなくても、「今、みんなに何か言ったら、どう言われるかな」と思うと、「ロック」がかかったように、私は何も言えませんでした。

今年度の活動の第一回目、知らない人ばかりで緊張しました。でも、初めて会う人たちには、「私へのイメージ」がありません。そのことが、私の気持ちを軽くしてくれました。周りを気にせずに自分の意見

が言えると思うと、わくわくさえました。

その日は、ネットトラブルについて話し合い、グループでまとめて発表するという活動でした。話し合いでは活発に意見が出て、とても楽しいものでした。夢中で話し合いをしていると、ある先生から、「高市さんは上手に話し合いをまとめているね。」と声をかけられました。その言葉を聞いたとき、私は意外でした。でも、言われてみれば、「次はあなたの番だよ。」というように、話し合いをリードするような声かけをしている自分に気づきました。いつも人の目を気にしてしまっていた自分が、何も気にせず思った通りに発言できていることに驚きました。私は「中学生サミット」に参加し、「新しい自分」を発見することができました。周りからのイメージがない「真っ白な自分」には、多くの可能性が秘められていると感じました。

しかし、それ以上に、大切なことに気づきました。それは、これまで新たな自分を見つけることができなかったのは、周囲の問題ではなく、自分の心の問題だということです。私は、今回の体験を通して「周りを気にしすぎていた自分」「イメージに縛られていた自分」に気がついたのです。自分の中の「イメージ」もリセットしなければ、かけられたロックは簡単に外れないのです。「ロック」はかけられていたのではなく、むしろ、「ロック」をかけていたのは、自分自身なのかもしれません。

自分のロックを外すためのその一歩として、まずは、生徒会役員として自分が正しいと思うことを発信し、実行していきたいと考えています。そして、これからは周りからのイメージにとらわれず、さまざまなことに挑戦し、自分の可能性を広げていきたいと思っています。





「戦争を忘れない」よくメディアで耳にする言葉だが、一体どういう意味なのだろうか。私は疑問を持った。私を含め日本人の多くは戦争があつた事実を忘れてはいないだろう。だとするならば、この言葉の本当の意味はなんなのだろう。

戦争についての基本的な知識は学校で習い、戦争は二度としてはいけないと思つた。この考えだけではまだ足りないのだろうか。まだ私たちには忘れていることがあるのだろうか。私は、実際に戦争を体験した祖母の兄に話を聞くことにした。

おじさんは私にこう問いかけた。「戦争と聞いてどのようなイメージを持ちますか。」私は答えた。「まず、食糧がほとんどなくて……。」その後は言葉が出てこなかった。戦争について、分かっていたつもりだったのに。本当は何も知らなかった。私はとても恥ずかしくなつた。それと同時に、自分自身の不甲斐なさに気付いた。

おじさんは、何も言えなかつた私にたくさんのお話をしてくれた。町を歩く人々が皆、戦闘服を着ていたこと。カタカナが日本から消えたこと。当たり前のように、アメリカの飛行機が空を飛んでいたこと。食べ物がないから自作してみるも、うまくいかなかったこと。お風呂にも入れず、体がシラミだらけだったこと。今となつては考えられないような、つらい生活について教えてくれた。私には想像しかできなかったけれど話を聞いていてだけで、当時の人々の苦しさ、悲しみ、怒り、悔しさ、たくさん感情が伝わってくる気がして、胸が締めつけられた。

最後に私は、「私たちが今忘れていいることは何だと思ひますか。」と尋ねてみた。おじさんは、こう言つた。「知らないのに忘れる事は出来ない。知つているのに思ひ出せない事を忘れるって言うんだ。」とおじさんの話を聞いたことで、私たちが忘れていいることは「戦争から学ぶ心」なのだと思ひ付いた。

私たちは戦争があつた事実を忘れたわけではない。しかし、戦争に對して無関心になつてはいないだろうか。戦争を体験した人にしか分

からないことを直接聞いたり、話し合つたりすること。戦争の悲惨さや被害の大きさ、失われた多くの命。これらのことを良く理解し次の世代に伝えること。そして、二度と同じような悲劇を起こさないこと。これこそが「戦争から学ぶ心」であり、「戦争を忘れない」という言葉の本当の意味だと思ひう。

私は今年、広島市の平和記念式典に参加した。そこは、たくさんの人であふれかえつていた。外国の方も大勢いて、私はとても驚いた。大げさかもしれないが、平和を願つていいる人が世界中にいたのだと実感することができた。

平和か戦争か、人間は選択できる。一人一人が平和を望む心を持つとき、平和な世界は必ず訪れる。





「誰かに助けてほしかった。」また同じ夢を見て、また同じ言葉で目が覚めた。

去年の十一月二十四日、雨の降る夜だった。私は、その日のことを決して忘れることができない。前の車が何かをよけて走っていくのが見えた。そこで、私は何も疑問に思うことはなかった。なぜなら私の住む地域では道の真ん中に動物が倒れていることがよくあるからだ。その日も同じように、何かの動物が倒れているのだろう、そう思っていた。でも、その直後、私の目に飛び込んできたのは雨に濡れる一人の女性だった。その女性は両手を大きく広げ震える声を張り上げて叫んだ。「ひけ、ひいていけ。」と。ずっと叫び続けていた声が急に聞こえなくなったのは、女性が助手席の窓を叩き、目が合った時だった。私はあの時の女性の顔が忘れられない。その女性は本当にひいてほしかったのだろうか。私には、どこか寂しそうで誰かに助けを求めているように見えた。でも、いくら助けを求めているように見えても、怖さで涙がこみ上げてきて、手が震えて、私には何もできなかった。その次の日から、その道を通るのが怖くなった。今でも、夜にあの道を通るときは、目を閉じてしまう。でも、目を強く閉じれば閉じるほど、あの日の場面が鮮明に見えてくる気がする。そして、いくつもの心配が頭をよぎる。あの女性は大丈夫だろうか、あの後どうなったのだろうか、誰かが救ってあげただろうか、と。

「自分にとってどんなに大切な人がなくなっても、それは数字で表すと一としか表されない。」戦争の授業の時、先生はそう言いました。一人、たった一人、そう考えると少ないかもしれませんが、どんな人にならって、その人を失いたくないと思っている人がいて、その人のことを大切に思ってくれている人がいます。二万人、この数字は何だと思えますか。この数字は日本で一年間に自殺している人の数を表しています。でも、二万人の一人ひとりには、家族がいて、支えてくれている人がいて、大切に育ててくれた人がいます。そんな人たちはたった一人がなくなっただけでそんな風に思うだけでいられるでしょ

うか。私は、母が一カ月近く入院していたときや父が救急車で運ばれたとき、心配でじっとしていられませんでした。たった一人、そんな意識なんてありませんでした。心のどこかがぼっかりと抜け落ちそう、すべてを失う気がして、その時、私は初めて命は決して自分一人のものではないのだと気がつきました。

どんな人の命も失われるべきではないのです。たとえ、罪を犯した人の命だって。一つ一つの命は数字では表せないほど重いものなのです。一つの命が誕生することは大きな奇跡なのです。だから、当たり前前に近くにいってくれる人、支えてくれる人、そんな人たちにこそ感謝の気持ちを伝えていきたい。感謝の気持ち、一言だけで、そのたった一つの優しさあふれる言葉で心は変えられる。心が変われば、見える世界が変わる、心が変われば、生きていくことにも希望が持てる。私はそう信じ続けます。そう信じ続け私は、誰かを救うために言葉を使い、心に寄り添うために勇気を出したい。あなたにも人を救うことができるのです。言葉に心をこめ、勇気を出すことができるのなら。大丈夫、誰だって救う力を持っている。誰にだって必ず助けてくれる人がいる。



現在、社会の状況はこれまでにないスピードで変化し、予測することが大変難しくなっています。これからの時代を担う中学生の皆さんには、変化の激しい時代の中、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、多様な意見に耳を傾けながら広い視野に立って物事を捉え、筋道を立てて考えたことを自分の言葉で表現することが求められています。

皆さんの発表を聴いて印象に残ったことを、三点お話しします。

一点目は、「気づく」ということです。

皆さんの発表には、登下校の時や部活動の中、友達との会話など学校生活の中の「気づき」、環境の変化による「気づき」、いろいろな言葉からの「気づき」など、様々な「気づき」がありました。この「気づき」は、皆さんがあるタイミングに「はっとした」ということです。この「はっとする気づき」は、毎日、もしかすると今この瞬間にもあるかもしれません。ただ、この「はっとする」思いは、単なる受け身だけではできないものです。主体的に物事を捉えようとする皆さんの思いがあればこそ、「はっとした気づき」があったのだと思います。

二点目は、「考える」ということです。

皆さんは、はっと気づいたことに対して、しっかりと自分のこととして「考えていた」ということです。自分の弱さや自分の行動に、どうして、なぜ、と「考えていた」皆さんがいました。悩み、苦しみ、どうすればいいだろうと「考えていた」人もいました。時には身近にいる家族や友達、先生と語り合うことで、より深く「考える」ことができたこともあったと思います。自らの「気づき」を課題として捉え、自分自身と真剣に向き合い「考える」皆さんの思い、そして、決意を受け取ることができました。

三点目は、「動く」ということです。

私たちは多くの場合「気づく」「考える」まではできることはあるかもしれませんが、次の一步を踏み出す勇氣を持って「動き」ました。時には他の後押しもあつたかもしれませんが、「動いた」のです。その一步は小さな「動き」だったかもしれませんが、その「動き」が自分自身を変え、そして、周囲を変えました。そんな皆さんの素晴らしい「動き」を受け取ることができました。皆さんのその一つ一つの「動き」が、今後大きなうねりになっていくことを期待しています。

本日の主張が皆さんの心を更に豊かにし、明日のよりよい社会を築くための「気づき」となり、そして、「考える」ことを通して、さらに高い志を持ち、それぞれの夢や希望の実現に向けて「動く」ことを期待しています。

平成29年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟

4 日 時

平成29年9月10日（日）午後2時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容（日本語で発表すること）

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や提言など。

以上のうち、日頃考えていることや感じていることについて、自由な発想で飾り気ない自分自身の言葉でまとめたもの。

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名
優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

- (1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。
- (2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 少年らしく新鮮で意欲的な主張であるか
- イ 主張の内容が明確で、論旨が一貫しているか
- ウ 主張の内容が共感と感動を与えるか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすいか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があるか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えるか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であるか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持時間を5分とし、持時間を超過した場合はその時間の長さに応じて減点をする。(5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。)

審 査 委 員

(1) 審査委員長 布施 東 雄 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 下 出 博 明 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

木 村 静 夫 (石川県PTA連合会 副会長)

牧 野 哲 栄 (石川県少年団体協議会 副会長)

荒 井 浩 志 (石川県小中学校長会 理事)

日 向 正 志 (石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会 (加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町)

「第36回 加賀地区中学生意見発表大会」

主 催：加賀地区市町教育委員会

共 催：石川県健民運動推進本部

日 時：平成29年8月19日(土) 13:30～

会 場：能美市根上総合文化会館

審査員：高橋 正英 (小松教育事務所長)

石黒 和彦 (加南地区教育委員会連絡協議会長)

谷口 徹 (能美市教育長)

田島 幸夫 (能美市小中学校長会)

西田 耕平 (能美市立図書館長)

発表者 (25名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
伝統文化をつなぐ	小松市立国府中学校	2	行松 快
思いを伝える	小松市立芦城中学校	2	横井 未菜
豊かさに繋がる働き方	能美市立辰口中学校	2	長谷川 愛
誰もが愛し愛される社会へ	小松市立板津中学校	2	西島 乃愛
「協調性」とは？	加賀市立橋立中学校	3	宮本 くれは
支えられて生きる	小松市立御幸中学校	3	新谷 朋希
家族は一つのチーム	川北町立川北中学校	1	泉 克来
強く生きる	加賀市立片山津中学校	3	前田 亮介
継続することの大切さ	小松市立芦城中学校	2	村中 志帆
明るい未来	加賀市立東和中学校	3	渡邊 元輝
学生の未来について	能美市立根上中学校	3	吉田 美空萌
地球の仲間を守りたい	能美市立辰口中学校	3	石田 航輝
見た目へのこだわり	能美市立寺井中学校	2	秋山 和佳
同じ「当たり前」のもとで生きる	加賀市立橋立中学校	3	谷口 葵羽
障がい者との向き合い方	加賀市立東和中学校	3	藤田 七星
次へ	川北町立川北中学校	3	浅田 夏菜
真っ白な自分の可能性	小松市立南部中学校	3	高市 夕理乃
野球から学んだこと	小松市立安宅中学校	3	西塔 風馬
私を成長させてくれた部活動	能美市立寺井中学校	3	中戸 志穂
私の兄	加賀市立山代中学校	3	中川 ひなた
私たちに出来る国際交流	能美市立辰口中学校	3	大家 美優
白黒の世界にやって来て	小松市立御幸中学校	3	伊藤 優理
「なぜ」を肥やしに	能美市立辰口中学校	2	瀬川 真大
ゴミ扱いされる動物たち	能美市立根上中学校	2	山田 さくら
みんなちがって、みんないい	小松市立国府中学校	3	須賀 結子

(2) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第27回 (平成29年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 内灘町教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 平成29年8月20日 (日) 13:30～

会場 内灘町町民ホール

審査委員 久下 恭功 (内灘町教育委員会 教育長)

永井 隆和 (石川県河北郡市校長会 津幡町立津幡中学校教頭)

木村 俊夫 (白山市PTA連合会 運営幹事)

菅田 峰行 (石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

吉本 広成 (石川県青少年育成アドバイザー協会 理事)

発表者 (20名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
戦争から学ぶ心	白山市立光野中学校	3	川上 結衣花
口癖に秘められたもの	白山市立笠間中学校	3	前中 皓多
かけがえのないもの	白山市立北辰中学校	3	加木 翔大
救いたい	白山市立鳥越中学校	3	米澤 愛
恵まれた環境と理解	津幡町立津幡南中学校	3	山本 修護
私たちが踏み出す第一歩	白山市立鶴来中学校	3	岡本 奈々
「ひなたとかげ」	白山市立松任中学校	3	菅本 駿介
同じ人間	内灘町立内灘中学校	3	谷内 玲香
先輩とは	白山市立北辰中学校	3	黒田 千紗
支え合って生きること	野々市市立野々市中学校	3	雨池 陸大
私の心の青空	白山市立笠間中学校	3	宮本 春菜
本音から生まれる友達	野々市市立野々市中学校	3	百成 佳歩
父から学んだこと	白山市立美川中学校	3	中村 小雪
自分はこの世に一人だけ	かほく市立宇ノ気中学校	3	米山 果穂
私が私であること	野々市市立布水中学校	3	朴 才瑛
言葉はバトン	かほく市立宇ノ気中学校	3	大江 萌香
生きていること、それだけで	内灘町立内灘中学校	3	高本 怜奈
自分の考えを発信すること	かほく市立高松中学校	2	竹田 有里
僕らが大切にしたいこと	野々市市立布水中学校	3	鍋谷 悠太
笑顔を支えたい	かほく市立河北台中学校	3	小泉 恵美奈

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第70回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 平成29年8月27日（日）9:00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭

発表者（27名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
パートナー	金沢市立西南部中学校	3年	山田 真音
オレンジの糸	金沢市立高岡中学校	3年	遠藤 愛実
日常に隠れているもの	金沢市立紫錦台中学校	3年	坂井 荘太
相手のために「一生懸命になる」	金沢市立鳴和中学校	3年	中谷 結偉
新しい可能性	金沢市立泉中学校	3年	西村 愛菜
一握りの力	金沢市立内川中学校	3年	大角 昌義
それはとても恵まれたこと	金沢市立長田中学校	3年	中村 望
学ぶことの意味って何だろう	県立金沢錦丘中学校	3年	福居 怜菜
負けから得ること	金沢市立芝原中学校	3年	岡野 愛子
希望の笑顔	金沢市立港中学校	3年	田中 鈴乃
親切は人を傷つける？	金沢市立森本中学校	3年	永井 海月
もういいや	金沢市立城南中学校	3年	長野 史門
私の芯	北陸学院中学校	3年	大竹 菜月
愛のリレー	金沢市立額中学校	3年	石田 真悠
居場所	金沢市立浅野川中学校	3年	道上 駿
わたしの目指すもの	金沢市立野田中学校	3年	前田 瑞季
部活動からの贈り物	金沢市立北鳴中学校	3年	建部 粹音
地域の伝統 - 「虫送り」 -	金沢市立清泉中学校	3年	田中 恵依子
あのときの気持ちをバネに	金沢市立医王山中学校	2年	森吉 美咲
しゃべることの楽しさと難しさ	金沢市立高尾台中学校	3年	中川 綾乃
名前を受け継ぐということ	金沢市立小将町中学校	3年	伊崎 愛那
言葉はわたし	金沢市立大徳中学校	3年	橋本 帆波
勝者たれ	金沢市立金石中学校	3年	若狭 春生
<山川草木悉有仏性>	金沢大学附属中学校	3年	宮武 佳生
「あたりまえ」を実行に	金沢市立緑中学校	3年	徳山 桃花
「明日」がくるということ	金沢市立兼六中学校	3年	塚本 真以
自分の存在と他人の存在	金沢市立犀生中学校	3年	納屋 沙也奈

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第49回全能登私の主張発表大会」

主催 第49回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 平成29年8月20日（日） 9:00～

会場 和倉温泉観光会館

審査委員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）

荒巻 幸子（石川県中能登教育事務所指導課長）

阿部 斉（七尾市教育委員会学校教育課長）

柳浦 勝（七尾市公民館連合会副会長）

藤波 博之（七尾市小中学校校長会代表）

発表者（10名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
勝利の先に見えたもの	七尾市立七尾東部中学校	3	後山 唯
「みんなちがってみんないい」	中能登町立中能登中学校	1	上野 菜湖
最後まで	七尾市立七尾中学校	3	山口 奈菜子
言いたいことを言葉に・・・	七尾市立七尾中学校	1	長谷 さくら
日常を守るために	七尾市立中島中学校	3	水本 愛里紗
二十分の徒然草	七尾市立七尾東部中学校	2	生長 陽仁
七尾から世界へ	七尾市立七尾中学校	3	宮下 歩土
僕が弟にできること	七尾市立七尾東部中学校	2	松生 希海
「無理」という言葉	中能登町立中能登中学校	3	中山 宙大
新しい一歩	七尾市立香島中学校	3	上林 美桜

仲間を守る一言

新潟県 燕中等教育学校 二年 平澤 幸芽

「Aちゃんをはぶろうよ。」

もし、友達にこう言われたら、あなたは本当の自分の意見が言えますか。私は言えませんでした。だから私は、この主張をします。かつてのAちゃんみたいな人が、少しでも減ることを願って。

「Aちゃんをはぶろうよ。」

仲の良い友達から、突然言われた一言だった。私には、Aちゃんを嫌う理由がなかったから、頭の中が疑問だらけだった。「昨日まで、仲良くしていたのに、何でいきなり？」しかし、その疑問は口に出せないまま、なんとなくなすくだけで、のどの奥に沈んでいった。

次の日から、身近な友達の全員がAちゃんを無視し始めた。Aちゃんが近づいてくると離れ、Aちゃんの話を守るように誰かが話を始め、Aちゃんをわざと一人にした。だんだんとAちゃんから笑顔が消え、やがて近づいてこなくなった。周りの友達は笑っていた。

私は「こんなことをしてはいけない」「こんなのいじめだ」と分かっていた。目の前で繰り返される残酷な光景に対して、分かっていたが、声が出なかった。これを言ってしまったらどうなるのだろうか。Aちゃんともう一度仲良くなれるのだろうか。それとも、次は自分がおられるのだろうか。自分がおられることは、絶対に嫌だった。だから私は、周りの人に合わせて、意味もなく笑った。自分の意見が言えないまま。Aちゃんを避け続けた。

それからというもの、友達という存在が、「楽しい人」から「疲れる人」へと変わっていった。もう一緒にいるのも疲れてしまい、面倒だった。けれど、嫌われたくないから、とりあえず何でも「うん」と答えた。私はそんな「友達」が嫌いだ。しかし、もともと嫌いな人がいた。それは自分自身だった。はっきりと「良い」も「悪い」も言えない自分が大嫌いだ。ある夜、ノートに真っ赤な文字で、「大っ嫌い、大っ嫌い。死ぬ死ぬね……」と書き殴った。そのペー

ジの一番上に、はっきりと「自分なんか」と書いていた。そんな中、インターネットを開き、画面に目を通していると、私は

ある言葉と出会った。「過去と他人は変えられないが、未来と自分を変えられる。」

それを見た瞬間、ドキッとした。まるで今の状況を理解して、私のために書かれているかのような言葉だったからだ。その時やっと気づくことができた。自分が変わらなければならないということ。私が言うべき言葉は「うん」という「自分を守るための言葉」ではなく、「こんなのいじめだよ。もうやめよ！」という、「大切な仲間を守るための言葉」だったということ。

「ねえ、もう、やめよ。」次の日、あの言葉に背中を押され、勇気を出して、私は友達に伝えた。「……うん。」少し間を置いて、友達は私の言葉を受け止めてくれた。そして、みんなでAちゃんに謝った。

今年六月、県内の中学二年生がいじめを苦にして、自らの命を絶つた。同い年の子が、私が想像もできないくらい、痛みや苦しみを抱えて命を絶つたであろうことにショックを受けた。それと同時に、もしAちゃんを避け続けていたとしたらと考えたとき、私は恐ろしい気持ちになった。誰も、彼を守ってあげられなかったのだろうか。周囲の人たちはみな、私のように、救いの一言を飲み込んでしまったのだろうか。「やめようよ。」その一言は、命が失われてからでは遅い。いじめは人を死に追いやる。だからこそ、周囲の態度は、それに対して責任をもたなければならぬと思う。

私は、今では仲の良い友達にも「良い」、「悪い」と自分の思いを伝えていく。安易に同調することだけが、友達ではないからだ。それから、「なんでもいい」という言葉はあまり使わないようにしている。「なんでもいい」は自分の意見を言うことを放棄していることであり、無責任な態度だからだ。今でも時々、「○○ちゃんってうざくない？」そんな言葉を耳にする。でも私は、「私はそんなことないと思うよ」と、責任をもって、自分の意見を言うようにしている。その一言が、周りの大切な仲間を守る一言になるからだ。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化スポーツ部県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) [検索](#)

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています